



アツバキミガヨラン



キジカクシ科リュウゼツラン亜科イトラン属（ユッカ属）*Yucca gloriosa*

北米南部原産。幕末から明治初期に移入したもので、洋風建築に似合う植物と考えられたのだろうか。先が尖った短剣のような厚めの葉は途中で垂れず真っ直ぐに突き出す。5月と11月に咲く。ただし同じ株が年に二度咲くかは不明である。花枝は樹の中心から直立し、所々に枝を伸ばす。そこに経5～6センチメートルほどの鈴状の白い花が、文字通り鈴なりに次々と咲き、シャンデリアのようで、豪華である。花の中には柱頭の先が3つに分かれた雌しべと、花柱の途中から分かれて鉤状に曲がった雄しべ（葯）が6つある。花卉は内側に3枚外側に3枚、都合6枚が重なっている。葯と柱頭が離

れていて、花粉を媒介する特殊な蛾（ユッカ蛾）が日本にはいない為に結実しないらしい。

イトラン属の植物はユッカと総称され、観葉植物として普及している。「青年の木」の別名は生長を続ける旺盛な生命力ゆえのことらしい。

この植物はかつて国会議事堂前に列をなして植わっていたらしく、牧野富太郎博士は議事堂に相応しい植物だとして、これにオトコランと言う奇妙な和名をつけた。帝国憲法の時代で、女性に選挙権も被選挙権も相続権もなく、国会は男だけの世界であった。揶揄かと思ったが、そうでもなさそうである。「キミガヨラン」の方は、やはり北米原産の近縁種 *Y. recurvifolia* であるが、東大植物園では *Y. gloriosa* とされており、*gloriosa* を「*noble* で崇高な」と解して命名した、とご本人が書いている*。北米原産の植物に「君が代」はどうかと思うが、そこは可憐な春の野花に「オオイヌノフグリ」と名付ける御仁である。人の記憶に残ることを旨としていたのだろう。その後オトコランは消え、葉の厚いキミガヨラン、すなわち「アツバキミガヨラン」に落ち着いたらしい。

学内には第4職員駐車場と大学の保育施設「ちゅとらのおうち」の坂道にある。足もとの覚えない幼児には堅く鋭い葉先は危険である。職員に話したら、早速伐り取っていただいた。しかし、この植物は根が深く

学校法人中部大学 監事 太田明德



て遅く、根絶困難らしい。

同じ亜科で属の異なるリュウゼツランは葉が多肉である。メキシコではアオノリュウゼツランを栽培し、糖分を多く含む茎の部分（肥大化して6-10年で40-50kgにもなる）を収穫し、蒸して破碎して絞り、得られた糖液をアルコール醗酵させる。発酵液を蒸留したものがメスカルと言う酒である。テキーラは、メキシコのハリスコ州サンティアゴ・デル・テキーラという地のメスカルの名称で、蒸留の段数が多いらしい。20年ほど前にサンディエゴから国境を越えて1日だけメキシコに入る機会があった。目的の半分はテキーラベースのカクテル、あのグラスの縁に塩を載せたマルガリータである。もちろん日本でも普通に楽しめるのだが。

参考)

- ・週刊朝日百科「世界の植物」第9巻、第102号2387頁、1977
- ・GKZ 植物事典
<https://gkzplant.sakura.ne.jp/mokuhon/syousai/agyou/a/atubakimigayorann.html>
- ・*「盗賊除け」、復刻版牧野富太郎選集5、「植物一日一題」所収、東京美術2023
- ・ヘイウッド「花の大百科事典」、p301「リュウゼツラン科」、大澤雅彦監訳、朝倉書店2005